
バカとハルヒと召喚獣

takumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとハルヒと召喚獣

【コード】

N9987Y

【作者名】

takumi

【あらすじ】

試験召喚システムを採用する文月学園に不思議を求めるSOS団
がやってきて……

1章 放課後の出会い〜バカとの遭遇〜（前書き）

二次創作です。涼宮ハルヒの憂鬱とバカとテストと召喚獣のクロスオーバーになります。

1章 放課後の出会い〜バカとの遭遇〜

「試験召喚」
サモン

新緑が生い茂る五月の放課後、僕はいつものように鉄人に雑用を
いいつけられていた。

「さっきも言ったが今日の仕事はここにある木材を校舎裏の廃材置
き場まで運ぶことだ。よし始める」

ちっ、えらそうに。もしも願いがかなうなら今すぐ鉄人を殴り倒
して帰りたい。召喚獣よりも強い規格外な鉄人を倒せるはずもなく、
そんなことすれば僕に待っているのは死よりも過酷な運命なのでこ
こはおとなしく従うしかない。

「わかりました」

そして、あと一往復で今日の仕事も終わりだろうかというところ
だった。

「ちよつと見なさいキョン！ 小さい子供が自分の何倍もあるよう
な木材を運んでるわ！」

「な、なんだあれは！」

声が聞こえたほうに目を向けると頭に黄色いリボン付きの力チユ
ーシヤをつけた美少女をはじめとする五人組が裏門のほうから僕に
熱烈な視線を向けている。

「ちよつと、何かしらあの子！ 不思議だわ！ 不思議だわ！ 古
泉君、何かしらあれ！」

「申し訳ありません僕にはちよつとわかりません」

「わあかわいいです！」

「……ユニーク」

「おいハルヒ、あまり見るな失礼だろ」

僕の視線に気づいた男子生徒が門に両手をかけシヨーウインドウ
を見るような眼をしている力チユーシヤの子を制していた。

「あの、なにか？」

ただ見られているというのも気まずかったので五人組に話しかけてみた。

「ああ、いえすみません。ちょっと珍しかったもので」

Fクラスのクラスメイトにはいないような常識人っぽい男子生徒が僕の召喚獣に目を向けながら返してきた。

「これですか？」

「そうよ！ その子一体どうなってるの！？」

「だから失礼だろハルヒ」

「いえいいんです、これは僕の召喚獣ですよ」

『召喚獣？』

五人組うち小さい女の子を除く四人が一様に声をそろえた。

「ここ文月学園はテストの点数で強さが変わる試験召喚システムというものを導入してるんです」

すると背の高い優しそうな男子生徒が反応をみせた。

「試験召喚システムですか……噂には聞いたことがありますね」

「古泉君何か知ってるの？」

「はい、詳しくは知りませんがあちらの彼が先ほど述べたとおりです。召喚獣を召喚して争うことで互いの競争心を刺激し切磋琢磨していこうという制度だったはずですよ」

「ってことはあの小さい子が召喚獣である男の子が召喚者ということ？」

「そのようですね」

そこまで話したところでカチューシャの子が満点の笑顔で僕に話しかけてきた。

「あなた名前は！？」

「吉井明久ですけど……あの、あなた達は？」

「これは失礼したわ吉井君！ あたしは涼宮ハルヒ！ で、こつちの背が高い男の子が古泉君、ぼーっとした顔してんのがキョン、この可愛いのがみくる、ちっこいのが有希よ！」

「はあ」

「私たちは北高のSOS団といって世の中の不思議を探しているの、あなたはあたしが今まで見た何よりも不思議だわ！ 誇っていいわ！」

「ど、どうも」

可愛い女の子から100%の好意を向けられるというのは照れる。

「ほら、やめるハルヒ吉井君が困ってる。ほんと失礼なやつですみません」

「なによキョン！ あんな不思議を目の前に指をくわえてるっていうわけ！」

どうやら召喚獣に興味があるみたいだ、確かに他の学校の生徒が見る機会はなかなかないだろうし。

「興味があるならこっちに来てみてくださいですか？」

そう言うのを待ってましたと言わんばかりに涼宮さんは門を飛び越え召喚獣に駆け寄ってきた。

「わあちっこいし耳としっぽが生えてるわ！」

「ほんとかわいいですう」

「不思議」

「ほう、確かに」

「噂は本当だったんですね」

他の四人も寄ってきて僕の召喚獣にそれぞれの感想を言い合っている。にしてもみくるさんはどこことなく姫路さんに似てる気が……

「この子名前とかあるんですか？」

みくるさんが僕の召喚獣を胸の前に抱いて……おお幸せの感触が。

「いえ、召喚獣は召喚獣ですからね。自分の分身みたいなものです」

「わっ手が滑りましたあ！」

「いってー！」

頭を押さえてうずくまる僕と召喚獣を皆不思議そうに見ている。

「確かに分身みたいですね」

古泉君、冷静に分析しないでくれ。

「おい吉井、仕事は終わったのか」

ゲツ鉄人！ もうすぐ終わるとはいえ仕事そっこのけで喋ってたなんてばれた日には自習室に監禁されてしまふ。どうするべきか、その木材投げつけても鉄人は死なないだろうなあ。

「むっ君たちは他校の生徒か、吉井の知り合いか？」

「ああいえ、僕たちはその……」

「こんにちわ、わたしは吉井君の友達の涼宮ハルヒといいます。召喚獣が珍しかったので吉井君に見せてもらっていました」

涼宮さんが僕のガールフレンドに！

「あの！ 召喚獣って文月学園の生徒以外には出せないんですか？」

「おいハルヒ何を言い出すんだお前は！」

「うちの学校でテストを受けなければ召喚獣は出すことはできない。君たちも早いところ帰るんだ」

「私にそのテスト受けさせてください！」

「他校の生徒には受けさせるわけにはいかない」

涼宮さんと鉄人が「受けさせる」「無理だ」の押し問答をしている。怖いもの知らずだな涼宮さん。

「待ちな、面白いじゃないか受けさせてやりな」

「ババ……理事長！？」

どこで聞いてたんだらうこのババアは。

「しかし理事長」

「いいんだよ、閉鎖的になるより他校と交流することで世間に対するアピールにもなるとあたしは前々から思ってたんだ、ちょうどいいじゃないか」

「本当ですか！ 任せてくださいあたしたちがバーンとアピールしてみせます！」

「頼もしいねえ、といっても今日はもう遅い、今週の日曜日にあんたたち五人でまた来なさい」

「吉井、お前のクラスから対戦相手あと四人選んどきな」

そう言い残すとババアはどこかに歩き去った。こここの瞬間文月学園初の対外試合が決定したのだった。

1章 放課後の出会い〜バカとの遭遇〜（後書き）

原作者の方に最大の敬意を表しつつ全6〜7話くらいの予定で送りしていきます。

2章 開戦準備〜文月学園〜

対外試合だと!？」

「うん、そうなんだ昨日北高の人が偶然僕の召喚獣見て自分たちもやってみたって言い出したところに学園長が来てさ」

「ババアの考えそうなことだぜ、どうせ対外試合で世間にアピールでもしたいんだろ」

「さっすが雄二、学園長もそういつてたよ」

「なんで俺らがそんなめんどくせえ事を……いや、明久、とりあえずババアのところに行くぞ」

「ん? どうした? 雄二」

「俺たちはただで協力なんかしねえってことだ交換条件を突きつけに行く」

「悪知恵だけは働くね雄二」

翌日、雄二とそんなやり取りをした僕は学園長の元へ向かった。

「交換条件だと? まあ大方そう来るとは思ってたが、何が望みだい?」

「さすがババア、話がよくわかるな。俺たちの要求は前回の試召戦争敗戦に伴う戦争禁止期間の無効だ」

「だれがババアだい。また性懲りもなく上位クラスに挑もうつてのかい、まあいいさそれがこのシステムの狙いでもあるからねえ。わかった認めようじゃないか。ただし北高に勝った場合に限るよ」

「OK交渉成立だ。あとはルールの確認だがどうなっている?」

「勝負は五対五で先に三勝したほうの勝ちだ。ただし今回は吉井を含むFクラスの選抜メンバーで戦ってもらおうよ」

「なんで僕は決定なんだババア長!」

「だれがババア長だい! 西村先生に聞いたところお前は昨日のやつらの友達だそうじゃないか。それとも見ず知らずの人間を学校内に招き入れたってのかい?」

ニヤリと薄気味悪い顔でババアが言ってくる。くそ、ババアめ謀ったなつ。

「こっちはもとよりそのつもりだ。科目はどうなってる」

「本来はランダムに決めるところだが戦略も立てられなくてはFクラスのお前たちじゃ北高には勝てないだろう。だから今回は各校二科目を指定で残り一つは当日ランダムで選ぶよ」

「わかったそれでいい」

「ちなみに順番は当日じゃんけんで勝ったほうから先に科目を指定することになる」

「よしわかった。もうここに用はない明久、戻るぞ」

「ちよつとまつてよ雄二！ 僕はまだババア長に言いたいことが」

「いいから戻るぞ明久」

「ふふ、精々頑張るんだねえ」

学園長室を後にした僕達は教室に戻り残りのメンバーを決めることにした。

「雄二、あとの三人は誰にする？」

「そうだな、とりあえず姫路とムツツリー二だな、あと一人は……」

「ちよつとちよつと聞いたわよ！ 面白そうじゃないウチもだしなさいよ！」

「美波！？」

「ちようど秀吉か島田で迷ってたところだ。理数系ではお前に分がある。よし、お前が出る」

「やったー！ 数学なら任せなさい！ アキ、足引つ張つたら承知しないわよ！」

「ははつなにいつてるのさ僕に限ってそんなことはあり得ないよ！」

「ほう自信があるのか明久」

「なにいつてんだよ、自信しかないよ！」

「そうかそうか、じゃあ負けたあかつきには屋上紐なしバンジーの刑だからな」

「そんなの余裕さ！……つてええっ!？」

「もう決まったことだ。それとも男に二言があるのか？」

……おのれ雄二め。

「くっ雄二こそ負けたらわかってるな？」

雄二が負けたら霧島さんにあることないこと吹き込んでやるっ。

「で、科目はどうすんのさ」

「まずは保健体育だ。これは向こうが指定してくるとは思えないからな。あとは明久、おまえの得意な日本史だ」

「やだなあ雄二そんなに僕に期待してるならはじめからそう言ってくればいいものを」

「勝負の鉄則はいかに弱点をさらけ出さないかだ。おまえはこのチームの穴だ」

そ、そんなにはつきり言わなくても……

「ちょっと坂本、ウチの数学は？ ほかの教科は自信ないわよ」

「相手にはおそらく理系の生徒もいるだろう、だから二つのうちのひとつくらいは理数科目で仕掛けてくるはずだ。そこに島田をぶつける」

「もし選んでこなかったら？」

「あきらめるしかないな。大丈夫だ。こっちはムツツリー二と姫路で二勝は確実だからな」

「はは、美波が負けても僕が勝つから心配ないよ」

「どういう意味よ！ ウチじゃ戦力にならないってわけ!」

み、美波さん、腕が曲がってはいけない方向にっ！

「アーツ!」

そんなこんなでこっちの作戦は決まり、あとは当日を待つのみとなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9987y/>

バカとハルヒと召喚獣

2011年12月2日00時50分発行